

いとうしゅんや／患者中心の医療実現のために、国内外を問わず数多くの医療現場取材。「現場にこそ真実がある！」と医療改革のため、多くの問題提起をする。著書に「最強ドクターの奇跡」など

State-of-the-Art
Medical Treatment
in Japan
by Shunya Ito

今週取材した医師・病院

渕野辺
総合病院
泌尿器科

設楽敏也 医師

住所／神奈川県相模

原市渕野辺3-2-8

電話／042-754-2222

このほかに
「HoLEP」を
行っている病院

坂泌尿器科
病院

住所／北海道札幌市北区

北30条西14-3-1

電話／011-709-1212

新潟県済生会
三条病院
泌尿器科

住所／新潟県三条市

大野畑6-18

電話／0256-33-1551

花井
クリニック
泌尿器科

住所／愛知県半田市

新宮町3-212-2

電話／0569-24-8713

関西医科大学
附属枚方病院
泌尿器科

住所／大阪府枚方市

新町2-3-1

電話／072-804-0101

西南泌尿器科
クリニック

住所／福岡市城南区

別府3-1-6

電話／092-852-2131

その治療法は
本当に
効くのか

行つて、見て、聞いた

新連載第一回

医療ジャーナリスト写真家

伊藤隼也

今回のテーマ

前立腺肥大症

おしっここの勢いがなく、時間がかる
トイレが近くなった(特に夜間就寝中)
下腹部に不快感や圧迫感がある
急がないと、トイレに間に合わない気がする
残尿感がある

最近、何となくおしっこの出が悪い……。そんなことを実感しつつも、そのままにしている中年男性は少なくないだろう。もしかしたらそれは「男の活券」ならぬ、男の股間に関わる一大事かもしれない。

男性の膀胱の下で尿道を取り囲み、栗のような形をしているのが前立腺だ。その「実」の部分の肥大し、尿道を圧迫してしまう病気が「前立腺肥大症」。早い人なら40代でおしっこの勢いがなくなったり、時間が長くなったりという症状が始め、否応なく老化の始まりを実感させられる。命には別状ないが、重症になれば尿が出なくなるなど、大変なことになるのは間違いない。治療方法は病気の

進み具合によって、経過観察から薬物療法へ、そして症状が重ければ外科手術となる。

最近では、重症の外科的治療の際に「ホルミウムレーザー」を使った「低侵襲治療」が活躍していると言及んだ。

前立腺肥大症の対象世代であれば、幼少時代にマンガやテレビで、光線銃(レーザーガン)を片手に大活躍をするヒーローの姿に胸躍

(左)手術に臨む設楽医師。中央の黒いモニターで前立腺の様子を確認しながら、レーザーを巧みに操る(下)左の白い器具が尿道から差し込んで病変を吸い出す



らせた記憶をお持ちの方も多かったろう。まさに、その未来兵器が、われわれの尿道の中から肥大した前立腺を目掛けて発射されている、ということになるのか。

さ。つそく治療現場取材した。訪ねたのは、渕野辺総合病院(神奈川県相模原市)の設楽敏也医師。「HoLEP(ホルミウムレーザー前立腺核出術)」の第一人者だ。手術室に足を踏み入ると、「ダダダダッ」という何とも機械的な音が耳に入ってきた。

この日の患者さんは76歳の男性だった。設楽医師のもとを訪れるのは、この世代が最も多いという。腰椎麻酔をかけられ、仰向けで足を開いた患者の尿道に差し込まれているのは、レーザー付きの内視鏡だ(写真左)。設楽医師は、前

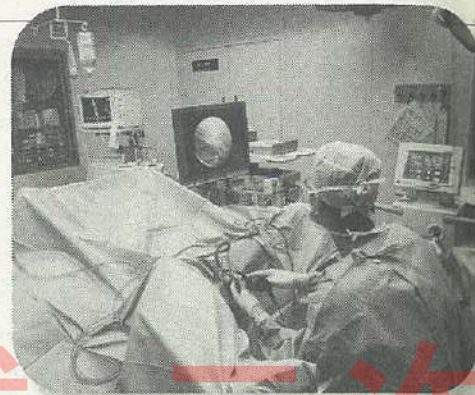
から剥がし、粉々にして吸い出してしまおうというのである。

TURPでは一定量の出血があり、輸血が必要となることもある。うえ、頭痛、嘔吐、けいれんなど、水中毒の合併症が起きるリスクもある。何より患者にとって辛いのは「痛み」だろう。術後数日間には鎮痛薬が必須だ。だが、「HoLEP」レーザーはわずか0.4mmしか侵襲しないため、痛みが少なく」と設楽医師は胸を張る。

「導入直後は痛みが出ると言われていましたが、手術法が改善されたいまは、痛み止めの座薬を使う患者さんは1割程度です」

「TURP」の入院期間が平均7〜10日なのに対し、「HoLEP」は半分以下。健康保険が適用されるため、手術費用もほとんど変わらない。患者にとっていいことづくめなのだ。しかも、楽になったのは患者だけではない。

「ホルミウムレーザーだと治療と同時に止血ができるため、出血は



きわめて少ないんです。手術中の血圧や脈拍などの変化が少ないから、麻酔科医の心配も減る。また、医師が慌てずにすむので、看護師の負担も軽くなりました。この病気が軽減したといっているんですよね(設楽医師)

な。ある種の余裕を感じられたのは、そういうわけだったのか。ところで、この「HoLEP」、どんなタイプの患者でも選択可能なのだろうか。

設楽医師は「議論はあるかもしれませんが」と前置きした上で、「大きさによらず、どんな肥大でも可能です」と断言する。

また、「HoLEP」を受ける術後、一時的な尿失禁を起しやすいため、指摘もある。だが、レーザー照射の際、排尿の際に使う括約筋という肛門付近の筋肉に影響を与えないよう、できるだけ離して手術すれば、尿漏れのほとんどは2〜3日で解消するという。

現在、国内の「HoLEP」の症例数は年間4000例から5000例ほどで、「TURP」の約4万例に比べれば圧倒的に少ない。その理由は、機器の価格が高額であること(渕野辺総合病院のもので定価3200万円)、そして

医師の技術が追い付いていないところにあるという。治療だけでなく、普及にも力を入れる設楽医師は、手術の見学者を積極的に受け入れ、全国各地を指導や講演に飛び回っている。

立腺の様子が映し出されたモニターに目をやりながら、レーザーを小刻みに当てていく。機械音は、このレーザーの発射音だったというわけだ。所要時間は約1時間。手術は短時間で終わった。

従来は「TURP(経尿道的前立腺切除術)」という方法が、前立腺肥大治療の世界標準とされてきた。これは尿道から内視鏡を入れ、肥大した部分を電気メスで削り取る方法だ。

「HoLEP」では、尿道から差し込んだ細いファイバーでホルミウムレーザーを照射して肥大部をくりぬき、それを生理食塩水で満たされた膀胱内に落とし、モーター(鋭い刃で病変を粉砕しながら吸引する管状の機器)で取り出す。栗の実は肥大した部分を皮

「年間1000例程度の手術をこなせる病院が各地域にできれば思っています。そこに患者が集まることでノウハウを蓄積し、技術が進歩するという形が理想です」

同時に、「前立腺肥大症は薬で治す病気」と盲目的に信じる医師や患者がいまでも多いことを気にかける。設楽医師が続ける。

「薬物療法は、症状の改善にはつながっても、完治することはありません。知識の不足が、患者の選択肢の幅を狭めてしまっているのは、非常に惜しいことです」

「HoLEP」は、医師の技術を伴ってこそ前立腺肥大の最良の治療の一つになると言える。実際、「HoLEP」をやっていると看板掲げる病院のなかには、治療時間が長く、尿失禁の後遺症が長引くという施設もある。安易に「HoLEP」を受けるのではなく、症例数(100例程度が目安)や合併症についても具体的に確認し、その上で受けるべきだろう。